

## 著作賞

中村哲、西村幸子、高井典子

『「若者の海外旅行離れ」を読み解く 観光行動論からのアプローチ』

(法律文化社 2014年2月)

### <講評>

本書は、共著者3名の6年間に渡る共同研究の成果をまとめたものであり、「若者の海外旅行離れ」という昨今よく耳にするが実態解明が不十分なテーマについて、非常に丁寧な手順で、実証的かつ理論的に取り組んだ意欲的な著作である。

「若者の海外旅行離れ」とは実際にどのような現象なのかを、統計データ、若者を対象としたインターネット調査などの分析といった量的調査と、若者へのインタビューという質的調査を組み合わせ、分析考察している。2000年代後半に1990年代と比較して20歳代の若者の出国率が低下したが、2012年には需要は復調している。そのような数値的な背景に加えて、インターネットの調査では、海外旅行に積極的に参加している人々、海外旅行経験はあるが積極派・消極派に二分されていること、海外旅行未経験者が海外旅行に消極的である実態が明らかにされる。

また理論的には、「観光行動論研究」として「観光行動における一般的意志決定」に関する新たな知見を提示している。従来の観光行動研究では、「なぜ旅行に行くのか」「旅行実施までにどのような選択をするか」など、あくまでも旅行することを前提とした理論構築がされてきたことに対して、本書では「なぜ旅行しないのか」という視点から、これまでの海外旅行経験の年齢や有無、同行者、旅行形態などを参照し、若者の海外旅行の実態を解明すると共に、意志決定の阻害要因を分析している。そして、海外旅行を実施しようとする「すりあわせ努力」への注目と「自己効用感」の高まりをキー概念として提示している。

なお、著書として出版する際に、観光学の実証研究の手順を示す参考書としての機能を持たせるよう工夫がされ、専門的な語句説明、コラムなどが随所に挟み込まれ、学習者としての読者にも配慮している。そのため、著作賞よりは教育啓蒙著作賞にふさわしいのではないかとも考えられた。しかし皮肉なことに、この工夫がされていても教科書としては平易とは言いがたく、むしろ学術的な調査分析手順を詳細に解説しているという印象に留まる。

また本著作は、共著ではあるが、共著者3名の一体的共同研究の成果としてチームとしての単著ともみなすことができる。また内容的にも、その問題設定、資料内容、理論的議論の成果を鑑みても、著作賞に値するものとする。